

第3章

ひととまちとのいい関係

“孤育で” 母さんへの 応援歌

●鶴見区／
鶴見保健所赤ちゃん教室

仲間づくりで悩み解消

「泣き止まない子どもを叩き始めると、止まらなくなるんです」

「私だけが社会に取り残されていくようで、あせってしまっ、つい子どもに手を上げてしまっんです」

自らの幼児虐待に悩む母親たちの声だ。核家族化や地域の育児機能の低下、また女性の社会進出の増加や価値観の多様化による少産化などにより、いま育児環境は大きく様変わりをしている。昔にくらべて育児がより個人的なものになり、その結果、子育てに不安を持つ若い母親が増えてきた。情報過多がかえって不安をあおり、話し相手のいない生活がその不安を増幅していく。あげくにノイローゼや子叩きに陥る母親。そこで、孤立しがちな母親になんとか手を



“外国人ママの会”は、日本で暮らす外国人ママにとってかけがえのないオアシス。さまざまな不安やギャップを少しでも解消できるよう活動している



赤ちゃん教室や乳幼児検診は母親同士の出会いの場としても機能している。こうしたきっかけから、育児の輪は広がる

さしのべようという動きが、各地で活発になってきた。

横浜市では平成三年度から「養育ネットワーク事業」という母親支援の取り組みを展開。「地域育児教室」と「地域子育てグループ・リーダー研修」の二本立てで、育児を“孤育て”から開放しようと図っている。

鶴見保健所で行われている「赤ちゃん教室」もそのひとつ。保健婦の経験から生まれた養育ネットワーク事業の輪は、いま着々と広がっている。

鶴見で「赤ちゃん教室」を始めたきっかけを、保健婦の杉山セツ子さんはこう語る。

「あるとき、大規模マンションに住む母親一年生を訪問したら、『ここは近所付き合いもなく、毎日赤ちゃんだけが相手です、すごく気落ちするんです』と、話し相手のいないつらさを切々と打ち明けられたんです。そこで、きつと同じ悩みを抱えている人がほかにもいるに違いないと、自治会の



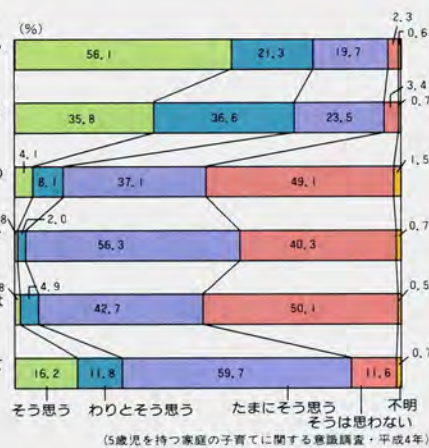
核家族化や地域社会との関係が薄くなっている現代では、母親の抱える悩みもより内向的なものになりつつある

協力を得て、団地の集会所で集まりを持つてみたんですね」

保健婦たちのカンはずなあって、一人で悩んでいた新米ママさんたちがたくさん集まり、多くの仲間を得て生き返った。その成果を見て、他の地域でも赤ちゃん教室が開かれるようになっていった。

それ以前から保健婦たちには、親を何と

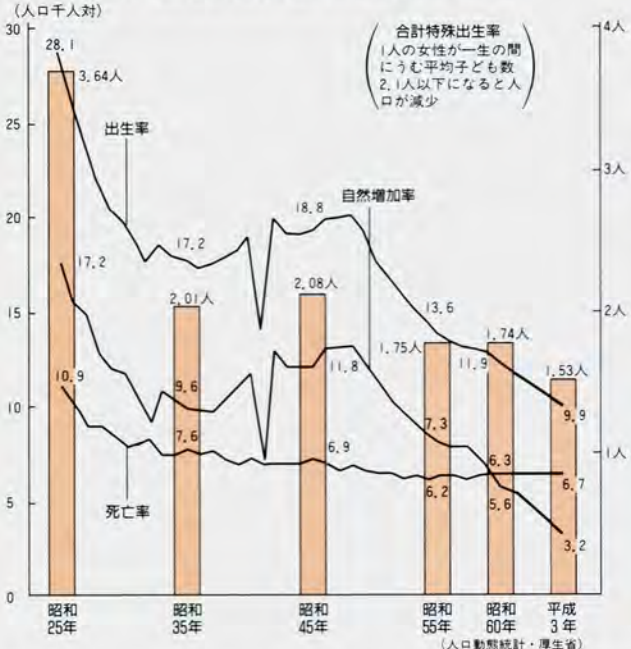
●子育てに対する意識
育児によって自分も成長していると感じられる



かしなければという思いがあった。「子どもが育てば親も育つ」、育児におけるこの「常識」がいつの間にか壊れてきていることが、保健婦たちには気がかりだったのだ。「子どもが可愛くないんです」と三歳の子の前で平然と言いつつ人。赤ちゃんとママがマニュアル通り育っていないと気がすまない人。子どものゆっくりに成長が待てない人。

こうした親が増えた背景には、地域社会との関わりが薄くなっていく状況があると杉山さんはいう。例えば、以前は結婚退職が多く、出産までの間に地域社会に溶け込む時間があった。しかし、最近は出産ぎりぎりまで働いているため、地域に友人をつくれなまま育児に突入。子どもを連れて公園に行っても仲間に入らず孤立し、育児

●出生率・死亡率・自然増加率および合計特殊出生率の推移 (全国)



仲間に「アラ、うちもそうだったのよ」といわれると、やっと安心するんです」と笑う杉山さん。一歳半健診を過ぎた頃には自主グループをつくって、今度は自分たちで集まりを持つようにしむけている。保健所では、町内会館など集まる場所を用意して、お母さんたちを応援。しかし、あとはお母さんたちの自由な活動にまかしている。

「最近はおパートで一人ぼっちでいるお母さんに声をかけてくれたり、町内会の役員さんたちが積極的に手伝ってくれるようになりました。よそからきたお母さんたちも、教室を通して町内の人と顔見知りになりますから、自然に地域に目を向けるようになるんですね」。どうやら育児教室は、母親同士だけでなく、若い世代を地域につながる役割も果たしているようだ。

鶴見保健所の育児支援活動はそれだけではない。区内の外国人ママさんを対象とした「外国人ママの会」も毎月一回開催して、母親同士の交流や生活、子育ての不安、悩みごとなどの相談に応じている。

参加している外国人ママさんのほとんどは、南米からの日系二世や東南アジアの人たち。通訳なしで、辞書を片手に身ぶり手ぶりの交流である。現在、参加登録しているのは三〇

地域と人を結ぶ育児の輪

赤ちゃん教室開催は、口コミで伝えるだけ。教室では特に決まったプログラムはない。母親たちが自由におしゃべりを楽しむ場づくりが目的だからだ。参加した母親たちは、みな異口同音に「同じような人たちと出会え、友達が増えてうれしい」という。暗い顔つきだった人が、みんなと話しているうちに、いきいきと輝いてくるのがわかる。「保健婦がいくら大丈夫といっても、もうひとつ安心してきかないようなんです。仲間」



「地域」は第二の母。育児の輪は子育ての大切な要素だ

人。平均七、八人が保健所の一室で行われる交流会に顔を見せる。暮れにはクリスマス会を開き、それぞれが持ち寄った料理で盛り上がった。まだまだ言葉の壁は厚いが、育児を通じて横浜にどけ込んでもらえればと、杉山さんたちは願っている。

地域の中で安心して子育てができるような育児環境づくりや、働く女性のさまざまな就業のあたりに合わせた保育形態の実施はもとより、父親の育児参加も今後の大きな課題である。本来、育児の責任は夫婦が共に負うものはず。しかし、多くの父親たちは会社にとっぴり浸りきり、育児に目を向けていない。そのため、母親ばかりに育児の負担がかり過ぎていく現実も、なんとか変える必要がある。

母親の毎日が明るくなければ、子どもの健やかな成長はおぼつかない。子どもの数が少なくなっているいま、子どもを産み、育てやすい環境の整備は、今後ますます重要となるだろう。

第3章

ひととまちとのいい関係

自主自立の 子どもを育てる

●金沢区／西富岡小学校

子どもたちの週休二日

子どもたちにゆとりの時間をつくろうと、学校五日制が始まった。

金沢区の西富岡小学校が、学校五日制の実施研究協力校に決まったのは、平成三年十二月。翌二月から他校に先がけて、月一回の土曜日が休業日となる（現在は二回）。実施日が近づいたある日の朝会で、小野正美校長は子どもたちにこんなふうにし「いっお休み」について話した。

「この日の過ごし方については、お父さん、お母さんとよく話し合ってください。ただし、計画をたてるときは、他人まかせにせず、自分が何をしたいかをよく考えて決めてほしいのです」

働き過ぎとの批判を受けて始まった大人たちの週五日制は、徐々に定着しつつある



「ふれあいゲートボール」は、世代を超えた交流の舞台

が、教育の現場ではつい最近まで、一部の私立校を除いて学校六日制はゆるぎそうになかった。だが、学歴偏重の現状は成績さえよければという風潮を生み、家庭内でも勉強優先となって、子どもたちから自由な時間を奪ってきた。この反省から、子ども

●休業日となる土曜日を子どもにどのように過ごして欲しいと望んでいるか
(複数回答・%)

	小学校	中学校	高等学校	養護学校
多くの友達とのびのび遊ぶ	56	34	31	20
趣味を広げたり、深めたりする	34	44	51	26
家族とのふれあいを深める	46	27	22	52
家事などの手伝いをする	33	37	50	60
学校の勉強の予習や復習をする	19	39	45	2
ゆっくり休養する	21	27	32	40
地域の自然や人々とのふれあいを深める	26	12	7	34
ボランティア活動に参加してさまざまな人々とふれあいを深める	12	13	14	6
スポーツや文化活動に興じる	28	27	22	12

(学校五日制実施協力校アンケート・平成4年)

を取り巻く環境にもゆとりが求められるようになり、学校にも週休二日の時代がやってきたのだ。

親と子が、また子ども同士が地域で共に過ごす時間を増やし、家庭と地域がそれぞれの教育機能を回復する。そんな教育環境づくりは、平成四年九月から全国いっせいに毎月第二土曜日の休業で本格的にスタートした。これにあわせて横浜市では、地域における社会体験、生活体験の場ときっかけを子どもたちに提供しようと、各学校に校庭や図書館などの施設の開放と、各校独自の自主事業の実施を依頼した。

これを受けて、西富岡小学校では、校長や学年ごとの推進委員に、PTA役員、地域代表として中学校長、町内会長などから

なる推進協議会を設置。学校、家庭、地域が一体となって、学校五日制の成果をあげるための活動に取り組んだ。

自主事業はごっく

ビデオ鑑賞会から始まった自主事業は、地域の人々の協力を得て、さまざまなプログラムを展開中である。そのひとつの「ふれあいゲートボール」は、地域のお年寄りにも学校に来てもらい、子どもと遊んでもらおうと、地元のゲートボール・チーム「西富クラブ」に声をかけ、実現したものだ。

土曜日の朝。ふだんの始業時間の八時半頃になると、子どもたちが学校に集まってくる。ランドセルを持たない子どもたちは、表情もどことなくのんびり。クラブのメンバーが準備したコートで、思い思いに練習を始める。十数人の子どもの上げる歓声と、動きの早さは、ゲートボールの印象を変えてしまう。元気いっばいの子どもたちは、たちまちゲームに熱中。「僕は初めてだけど面白いよ」「私、こんど田舎へ行ったら、おばあちゃんと一緒にやるんだ」と目を輝かせている。お年寄りとの混成チームで紅白試合。日頃の練習がものをいって、お年寄りの選手が強い。だが、ここでは子どもに指示を出したり、叱咤する声は飛ばない。終始、のんびりプレーに徹している。「勝ち負けはどうでもいいんです。子どもと遊ぶことが目的ですからね」と、クラブのメンバーの笑顔も満足そう。十時を過ぎた頃、一階の教室では「読み

聞かせ教室」が始まった。西富小の元PTA Aという佐藤さんと藤野さんの二人の主婦が担当。低学年の子どもたち一〇人ほどを相手に、昔話や紙芝居を読み聞かせている。プロのアナウンサーにコーチされたというだけあって、表情豊かな語り口に、こちらも思わず引き込まれてしまう。朗読の勉強をしていたお二人。発表の場を探していた

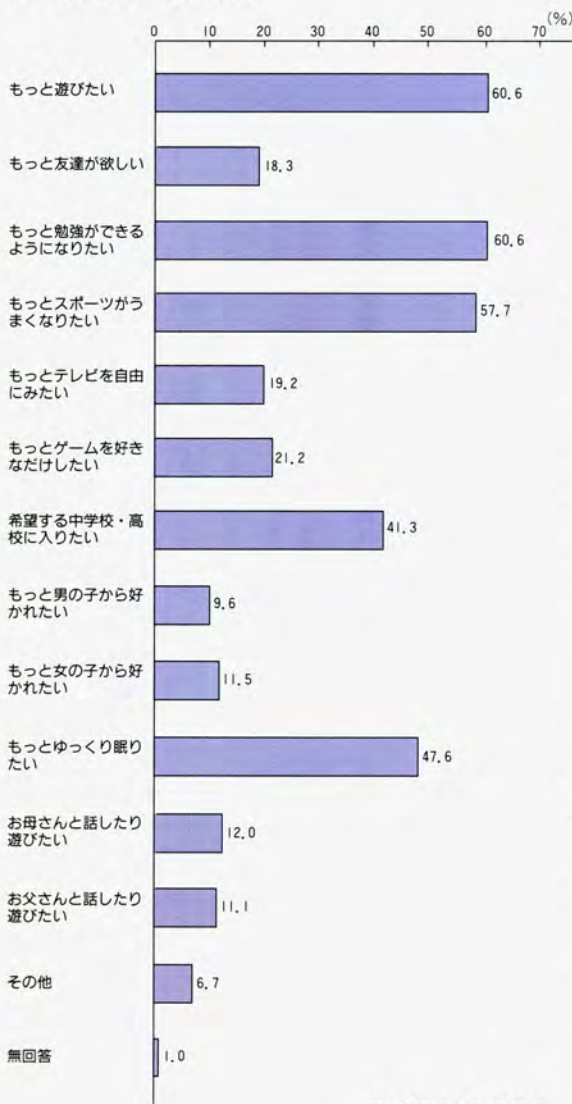
が、たまたま西富小の学校五日制支援事業の話を知り、ボランティアを買って出た。いまは子どもたちにも本を「読んであげる」だけでなく、今後は、子どもたちの反応を見ながら、人形劇などを子どもと一緒にやっていきたいそうだ。

西富岡小学校が、土曜休業を始めて二カ月後に行った保護者へのアンケート調査で



“読み聞かせ教室”では、ボランティアの表情豊かな語り口に思わず引き込まれる

●子どもがいま、一番したいこと



(市民生活行動調査・平成4年)

は、七割を超える父母が月一回以上、土曜休みを得ており、土曜休業についても同じ割合で賛成している。だが、自主事業については、さらに活性化を望む声が強い反面、「参加が半強制的にならない

いか」と心配する声もある。「人と同じことをしていないと不安」という国民性から、「みんなが行くから行く」となりやすく、結果的に子どもたちの主体性を損なうことにならないかと危惧する親がいることも、

土曜休業を自立した人生を歩むきっかけづくりにと願う朝会での小野校長の思いは、小さな市民たちに届いただろうか。



インディアカも活動のひとつ。学校五日制は子どもたちの生活にゆとりを与えるだけでなく、地域の活性化にも役立つことだろう

一考しておく必要がある。今後、自主事業が、大人が用意したメニューに子どもたちが参加する、にとどまるのか、親子や子ども同士の生涯学習の場のようなかたちで発展していくのか、いまはまだ模索の段階である。

いずれにしても、学校五日制の主役は、あくまでも子どもたち。自主事業は、子どもたちが自由な時間に何をするかを考えるときの、ひとつの選択肢にすぎない。

自分で考え、自分で判断できる市民を育てることが教育の目的のひとつであるとするならば、学校五日制はまたとない実践教育のチャンス。自由な時間を自主的に使いこなせる人間こそが、地域や社会を活性化させることができるのだから。

第3章

ひととまちとのいい関係

空き缶集めて 未来を救う

●保土ヶ谷区／
峰岡町二丁目自治会

リサイクルと高齢者福祉をトッキング

「お早ようございます。自治会のアルミ缶回収にご協力お願いします」

毎月第四日曜日の朝十時になると、保土ヶ谷区峰岡町二丁目一三〇〇世帯の家族に、拡声器からの元気な声が響きわたる。軽トラックの荷台には環境部の役員さんたちが乗り込み、家の門口に置かれたアルミ缶入りのポリ袋を見つけては身も軽く飛び下り、拾い上げていく。勝手知ったる町内のこと、ときには素早く路地に散ってアルミ缶を集め、ひよいひよいと車の前に現れてはまた荷台へ乗り込む。坂道の多い町内だが、みんな軽々と走り回っている。とても平均年齢六十何歳とは思えない身のこなしだ。酸性雨、オゾン層の破壊、温暖化など、いま地球規模の環境破壊が進行している。

環境保護は人類共通の課題となり、環境問題への市民の関心もこれまでにない高まりを見せている。

平成二年に行われた「横浜都市環境市民意識調査」によれば、環境問題としても市民の関心が高かったのは、「ごみの増大や資源の浪費」という身近な問題であった。「よこはま三万人アンケート」でも、「横浜は今後どのような都市をめざすのが望ましいか」という設問に対して「地球環境を大切にする都市」をあげた市民が、三五・三%に上った。こうした意識を受けて、市民や行政のごみ減量や資源リサイクルへの取り組みも本格化のきざしを見せている。峰二自治会が、省エネ率九七%ともしっかりリサイクル効率が高いアルミ缶回収を始めたのは平成二年から。以前から自治会ではごみ問題への関心が高まっており、リサイクル活動を始めようという機運は盛り上

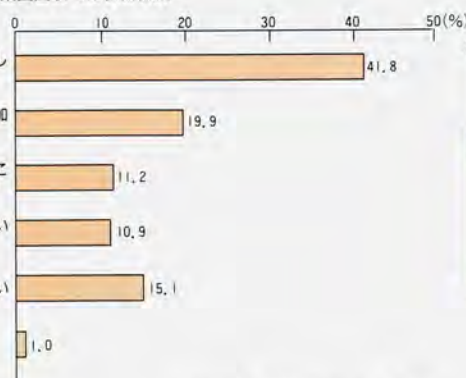
がっていた。幸い町内の大工さんが軽トラックを運転して協力してくれることになり、どうせ回収するならその収益を高齢者福祉に生かそうと、食事サービスも始めることにした。町内に高齢者が増え、みんなでお年寄りを支えようという話が持ち上がったので、絶好のタイミングでもあった。

脱大量消費・大量廃棄社会へ向けて

回収は全コースを二回ずつ、最初の「お知らせ」を入れると、全部で五回は回る。一回では気づかない人がいるからだ。確かに二回目にも、大きな袋が置いてあったり、家から飛び出してきた手渡しする人が少なからずいた。お年寄りや子どもの姿が目立つのは、この年齢層がもつとも環境問題への関心が高いことと、アルミ缶回収をお年寄りの仕事にしている家が多いからだという。お年寄りにも家の仕事に責任を持ってもらおうと同時に、お年寄りにとっては、食事サービスに貢献しているという自負も得られるわけである。

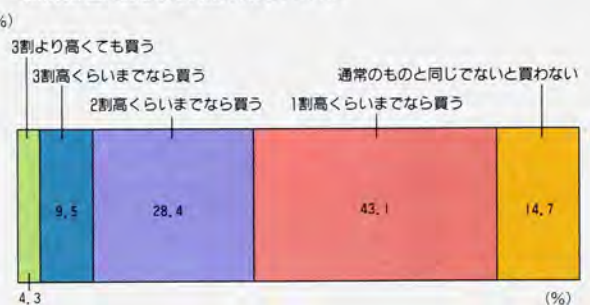
量は真夏時よりも少ないが、それでも毎回トラックいっぱいになる。それを自治会館の前で待ち構えている環境部の役員さんや、助っ人の女性や若い人たちが、片っ端から踏みつぶしていく。「真ん中をまずV字型に踏み、次に両端を踏むのっ」と、つるつるすべる缶と格闘していたら、手際よく踏みつぶすコツを伝授された。夏場は炎天下で冬の倍以上を踏まなければならない大変な重労働となる。

●ごみの集団回収への参加状況



(ごみ処理に関するアンケート・平成4年)

●環境保護に配慮した商品の購買について



(環境問題に関する市民アンケート・平成4年)

「暑さと缶に残ったビールのすえた臭い」として、みんな終わり頃には気が遠くなるのよ」と笑う柳下タマさん(78)は、役員の最長老。食事サービスの料理づくりにも率先して関わっている。「年寄りにはいい運動だよ」と、額の汗をぬぐいながら、みなさん



とにかくタフである。悲鳴をあげたのは若者たちだった。

アルミ缶は、キロ五十〜八十円で売れる。磯子区まで二カ月に一度運ぶ。夏場は二五〇グラム以上にはなるが、食事サービスの費

用をまかなうには程遠い。

「地域の人に、環境問題、リサイクル、高齢者福祉に関心を持ってもらうのが本当の目的ですから、収入は二の次なんです」とは役員さんのひとり、鈴木健一さん(71)の

市民一人ひとりの意識がより良い地域環境へと変えていく

使い捨ての風潮を見直そうと、各地でフリーマーケットが盛況



弁。拡声器の声の主である。

「肉声でない」と気持ちが届かないから」と、鈴木さんたちは巡回のときに決してテープは使わない。窓から合図を送ってくる人や、小走りに駆けてくる人たちに、鈴木さんはこまめにマイクで声をかけていく。はじめは反応がなく、どうなることかと思った空き缶回収だが、いまでは順調にいつている。隣の町内会の人も出してくれるようになった。『置いておくのは失礼だから』と、必ず門のところまで待っていてお礼をいつてくれる人もいる。しかし、アパートに住む学生など、無関心な人もまだ多い。それだけに、「たとえ一個、二個でも、お年寄りが一所懸命持ってきてくれるとうれしいよね」と、役員さんのひとりがつぶやいていた。峰二自治会に刺激されて、まわりの自治会も回収を始めている。

食事サービスは、月一回、自治会館で開かれており、毎回、五〇人ほどの参加者が

ある。空き缶回収の収益は、福祉部、婦人部の人たちがつくる食事へと形を変えながら、地域の結びつきを強めることに一役買っているのだ。

空き缶回収の取り組みを、単なる再生資源回収で終わらせては意味がない。その活動が人々に大量消費・大量廃棄型のライフスタイルへの反省をうながすきっかけとならなければ、資源の無駄遣いは続くことになる。そのためには鈴木さんがいうように、リサイクルを一過性で終わらせないこと、地域の人とにかく関心を持ち続けてもらうこと、がなにより重要といえるだろう。横浜市も、いよいよ平成五年三月から、ごみを資源として生かすための分別収集を開始した。リサイクルの輪をまわすには、すべての市民と行政、そして産業界が一体となった、腰の座ったリサイクル活動を展開しなければならぬ時期がきたようだ。



環境問題は身の回りから。使用済みの食用油を利用した、無公害の石けんづくりに関心が集まる